

個人の論文集は別として、多数の寄稿を集めた研究論文集で全体を面白く読めるものはきわめて少ない。本論文集は例外中の例外に属する。本書を読みながら、「文学研究とは何か」と自問してみた。セルビア文学史上傑出した存在にモダニズム（表現主義）から出発した詩人・作家ミロシュ・ツルニャンスキイ（1893-1977）がいる。ツルニャンスキイの研究家に詩人で文学者のアレクサンダル・ペトロフ（1938-）がいる。ペトロフの著書『ツルニャンスキイの詩とセルビア詩歌』（1971年）はペトロフがザグレブ大学に提出した博士学位論文で、ツルニャンスキイの詩の形式と内容を緻密に分析し、セルビアの詩歌の伝統のなかで位置づけた研究である。この論文は、当然、存命中のツルニャンスキイの目にとまった。その論稿を読んだツルニャンスキイは「私の文学上の最大のライバルが現れた」と感嘆した、と言う。この話は評者が1988年にペトロフ本人から聞いたもので、詩人特有の自惚れはあるとしても、再版本（1988年）を読むかぎり、ツルニャンスキイの詩の研究の最高水準を示す論文であると同時に気品をそなえた文学作品となっている。

論文にも読者がいる。学術誌のレフェリー制という忌むべき“検閲制度”が新奇な術語の氾濫する、やたらに難解な論文を産み出しているような気がする。研究対象に応じて内容が難解なのは仕方がないが、無味乾燥な文章は読者を惹きつけない。それ自体文学作品とは行かないまでも、せめて艶のある文章で書かれた論文であるならば、文学的な生命力を失わない。その良い見本は、どれと名ざすことは控えるが、本書の中にいくつか見出される。

本書はいみじくも『ロシア文化の森へ』と題する。ロシア語の諺に“Чем дальше в лес, тем больше дров”「森の奥へ行くほど薪が多くなる」と言う。森に奥深く入るほど収穫も多いが、困難な問題も多くなる。森は文化を拒否する異界であるから用心が要るが、大胆な知的好奇心をもって“дремучий лес”にさらに深く踏み入った成果を本書につづくものとして期待したい。（くりはら しげお・創価大学）

中村喜和著

『ロシアの風—— 日露交流二百年を旅する』

風行社, 2001年, 327頁+ix

和田春樹

中村喜和さんのロシア・エッセイ集は、すでに本書で二冊目である。前著『遠景のロシア』がロシア史上の昔の人物、古都めぐり、フォークロア、風俗といった話題を集めていたのに対して、本書は第一部が「ロシアの人びと」として中村さんが直接間接に交流した同時代のロシア人、第二部が「文学・フォークロア・書物」で、第三部が「ロシアと日本人」という構成である。文章も自在になり、味わいがますます出てきて、読み進めると、中村さんの世界にひきこまれる感がある。

第一部では、まず対日使節レザーノフが登場する。彼は昔の人だが、彼の回想が新たに発掘され、ロシアで公開され、日本で大島幹夫氏の訳で岩波文庫に収められたことが紹介されている。そこで航海中に艦長クルーゼンシテルンと対立し、彼のいじめによりレザーノフが苦しめられたことが語られている。ロシアでも露米会社の新しい研究の中で、レザーノフの名誉回復がなされているとされている。結論は、司馬遼太郎氏の『ロシアについて』でレザーノフが酷評されていることへの批判である。レザーノフがサンフランシスコの警備隊長の娘と恋におちるほどの魅力的な男であったという話も含めて、このすべてに賛成だが、やはりレザーノフ問題の最大のポイントは、長崎に六ヶ月滞在して、何も与えられずに追い返された以上、彼が立腹したのも当然だということであろう。

つぎにピリニャークと秋田雨雀の「ひびわれた友情」。これは第三部の「鳴海蔵書の成立事情」と直接的につながっている。ともに鳴海完造の日記という興味深い資料をもとにしている。秋田雨雀と鳴海完造は1927年にピリニャークに会って反発した。社会主義に進むこの国にいるブルジョア分子とみたのである。他方米川正夫は社会主義者ではなかったので、ピリニャークと深い親交を結んだ。となると、この話はやはり日本人のロシア観の話である。だとすれば、第三部にもって行って、秋田と鳴海が三七年の大テロルでピリニャークが逮捕処刑されたことに対してどう反応したかを書く方がよかったのではないか。ロシア人ピリニャークの運命について重点を置くのなら、陸軍大学ロシア語教官米川正夫との関係がピリニャークを日

## 書評

本のスパイだとするのにも利用されたことにも触れるべきであったと思う。

それからロシアの農民の自伝の話が二つ、旧儀派の村の話が二つ、白系ロシア人の食料品店の主人の話、いずれも興味深い。

しかし、私がかつとも惹かれたのは、万葉集の訳者グルースキナ女史についての文章である。中村さんが発掘した彼女の短歌がいい。ロシア人がこれほど日本文化の中に入る力をもっているということは感動的である。『北嵯聞略』の訳者コンスタンチーフについての文章もいい。私もコンスタンチーフの息子ポストニコフ氏に会ったので、よけい親しみを感じる。グルースキナもコンスタンチーフもソ連の日本研究の第一人者コンラドの弟子だが、二人は一九三七年と三九年に「日本のスパイ」として逮捕されている。グルースキナの逮捕に関連して、中村さんは「コンラド、ネフスキの二人の師をはじめグルースキナの上記の同僚たちはすべて一九三〇年代の末に逮捕された経験をもっていた」とさらりと書いている。これは大変なことである。中村さんはさらにグルースキナが獄中で「一貫して示した毅然たる態度」は検事にも感銘を与えたと書いている。

ここで中村さんが依拠したレシチェンコ編の『ロシアの東洋学者たち』（一九九八年）を見ると、逮捕されたグルースキナが逮捕された師コンラドの前で尋問されたことが書かれている。コンラドはすでに調書に署名していたが、グルースキナは師を「水晶のように純粋な人」だと擁護し、調書に署名しなかった。ソ連で日本を研究した人たちはその時代にみな「日本のスパイ」とされて抑圧されるという共通の危険性にさらされていたのである。そういう中でこの人々が守り抜いた日本文化に対する愛は実に敬服にあたいするものであった。

コンスタンチーフについては、彼が赤軍の関係者として対日諜報に関わっていたらしいことを中村さんは慎重な表現ながら示唆している。コンスタンチーフは一五年間ラーゲルにいて、出てきてから、『北嵯聞略』を訳した。

中村さんにとって重要なロシア文化研究の大家リハチョフについて書いた「リハチョフ博士随記」も面白い。これまたソロヴェツキー修道院に収容されていたソビエト政権の元囚人の大学者は共産主義は「悪夢」だったと言い切り、断固エリツィンを支持するのである。

若い東洋学者スヴィリードフの日本での死と日本語で詩を書くロシア人トルシチョーフについての二編も

こころのこもった文章である。

最後に作家二人、ベローフとソルジェニーツィンについての文章がくる。ベローフについては、中村さんは親しいつきあいに基づいて、この農民出身の作家の人物をよく描いている。ソルジェニーツィンの方は、一緒に科学アカデミーの金メダルを受賞したときの出会いについての文章だから、表面的な感想だが、たしかにこの怒れる大作家は意外に小柄な人であったという感想は、その場にあわせた私のそれと同じである。

第二部は本に関わる雑多な話である。アフナーシェフの名高い本について書かれた「解禁された滑稽譚」がおかしいくらいまじめで、面白くない。中村さんの訳された『ロシア滑稽譚』は一九七七年に出た本だが、もう著者略歴の訳書の部分にも記載されていない。知らない読者にはなんのことかわからない。「滑稽譚」ではなくて、「艶笑譚」とでも名付けてあげば、すぐにわかるのだが、これは品のない言葉だから、中村さんが嫌って、「艶っぽい昔話」と書くのが精一杯のところだというのはわかる。しかし、それにしてももう少しアフナーシェフが何についてどう書いているかを説明した方がよかったと思う。

ドヴジェンコの映画「航空都市」についての文章「生は短く、芸は長し」はドヴジェンコ映画祭のパンフレットに書いた文章だから、やむをえないが、内容は逆だと思う。芸術としてはつまらないが、その時代の生をうつつしているかぎりは興味があるということである。一九三五年のこの映画は日本が満州を占領した後、ロシアへ攻めてくるのではないかという緊張感の中でつくられた。日本軍人を戯画化して、くるならこいという戦意高揚の映画である。シベリア出兵のときのパルチザンの生き残りはふたたび立ち上がるぞと言うし、その息子は飛行士として空の守りにつく。旧儀派は裏切るなら、容赦しないというわけである。

第三部は本書の副題「日露交流二百年を旅する」からすると、もっとも重要な日本人のロシア体験を書いた部分である。そこから日本人の考え方の問題点を中村さんは指摘している。高い点数がつけられているのは大黒屋光太夫である。彼の話をもとめた『北嵯聞略』を当時のロシアの生活風俗を知るための資料として読むという観点を中村さんは出している。私も同感する。それだけの内容がある重要な資料である。他方、ラックスマンを迎えた幕府の交渉姿勢については、その鎖国意識を父ラックスマンの開放的な思想と比較して、「両者のへだたりの大きさにわれわれは驚かされる」として、「現代の日本人の常識の中にも少なからず誤った固定観念があるのではないか」と結んでいる。

同じ態度は榎本武揚の「シベリア日記」についても示されている。この日記を当時のロシアの交通事情を伝える資料として読むというやり方である。これもいい。チェーホフの「サハリン旅行記」も同じく役に立つ。

「掛け金として函館」は、日露交流にこの町が果たした役割を指摘する内容はいいが、題名がおかしい。「掛け金」というのは広辞苑では、扉をしめるためのものであるから、ここは「架け橋」とか、「扉」とか「窓」とか言った方がよかったのではなかろうか。

第三部では、やはりすでに述べた鳴海完造の話が興味深い。一九二七年にロシアに行って三五年まで滞在した鳴海の体験は充実したものであった。ショスタコーヴィチとの交友も面白い。鳴海日記の本格的研究がのぞまれる。

最後から二番目にロシア科学アカデミーから金メダルを受賞したときの受賞演説が取められている。ソルジェニーツィンと壇上に並んだ中村さんの姿はいまま記憶にあたらしい。日本とロシアの「架け橋」である中村さんの演説はみなにあたたく受けとめられた。「日本とロシアのあいだには、『北方領土』だけではなく、長期にわたる堅固な文化的な結びつきの存在したことを想起することが必要であると思われまます。」帯にも引用されたこの言葉は中村さんの核心的な主張である。あの日の壇上の中村さんは立派だった。

本書は『ロシアの風』と題されている。すんだ、いい風がしずかに吹いている。その風に身体と頭をさらすのは心地よい。

(わだ はるき・東京大学名誉教授)

アンドレイ・シニャフスキー  
(アブラム・テルツ) 著  
『プーシキンとの散歩』  
島田陽訳  
群像社, 2001年, 237頁

沼野充義

『プーシキンとの散歩』は、アンドレイ・シニャフスキーがアブラム・テルツ名義で発表した「作品」の一つである。初版はシニャフスキーがソ連から亡命した2年後の1975年、ロンドンの出版社から出た。<sup>1</sup> 小ぶりの洒落た作りの本で、表題が指し示す通り一応はプーシキンをめぐる論考だが、実質的にはいかにもシニャフスキーらしい奇想に満ちた文学的エッセイといったところか。プーシキンを言わば肴にした一種の創作に近いものであって、厳密な文学研究の実証的立場からとやかく批判するべきものでないとはすぐに知れる。ここで展開されているのは、軽やかで、実利的な目的を持たず、空虚で、それゆえ普遍性を帯びることのできる「純粹」な芸術をめぐるシニャフスキーの自由な思考の運動に過ぎない。もともとソ連で獄中に書かれた(1966-68年)著作であるにもかかわらず、ここにはソ連体制をめぐる時事的な問題も、センセーショナルな政治的告発も一切不在である。ちょうど同じ時期に全世界を騒がせていたソルジェニーツィン(シニャフスキーの最大の論敵)の『収容所群島』とあらゆる意味で対照的だ。

この本をめぐる運命の最大の皮肉は、そういったささやかな文学的著作であるにもかかわらず、政治的コンテクストに巻き込まれて、二度にもわたって激しい非難の渦を巻き起こし、論争の焦点となってしまったということである。最初は初版の刊行直後から、西側の亡命ロシア社会で。ロマン・グーリヤやソルジェニーツィンといった亡命ロシア文学界の大物が、シニャフスキー批判の急先鋒に立った。2度目はペレストロイカ期のソ連で。1989年に本書の数ページ分の抜粋が月刊文芸誌『十月』に掲載されただけで、「民族派」と呼ぶ傾向の人々の猛反発を買い、シニャフスキーは「ロシア嫌い」として非難された。そのどちらの場合も、批判の核心は、シニャフスキーがロシア人にとって神聖不可侵な国民詩人を冒瀆しているという点にあった、と要約できるだろう。その意味では、本書はシニャフスキーの著作の中で最も有名な(悪名高い?)問題作である。

日本ではシニャフスキーの紹介は彼の「反体制作